

(研究資料紹介) 平澤屏山筆「種痘施行図」

濱 田 淑 子

Items of interest from the Museum collection A documentary painting by Hirasawa Byozan *Compulsory vaccination of the Ainu people*

HAMADA Shukuko

キーワード : 平澤屏山 種痘施行図 桑田立斎

要旨

19世紀半ばに、アイヌ集落に天然痘が流行し多くのアイヌの人々が亡くなった。その状況を憂えた箱館奉行の村垣範正は、江戸幕府に医師派遣を要請した。医師の桑田立斎が選ばれ、江戸を出発してから1カ月で箱館に到着、1857年に世界で初めての集団強制種痘をアイヌ6,000余人に実施した。その顛末を商人の杉浦嘉七がアイヌ風俗画家・平澤屏山に描かせ、村垣家に献上した。立斎は1859年に原本をもとに模写を作らせて家蔵本とし、さらにこの模写本をもとに1941年に林司馬が模写をした2点が作られたが、肝心の原本の所在が長く不明であった。この絵は日本の医学史上、行政支配上記念すべき記録画とされているが、当館所蔵の平澤屏山筆「種痘施行図」が1857年に描かれた当初の原本と考える。

Abstract

The Ainu people suffered from smallpox in the mid-nineteenth century. Muragaki Norimasa of the Hakodate magistrate's office called on the government in Edo to send a doctor. Dr. Kuwata Ryusai went to Hakodate and compelled 6,000 Ainu people in all to be vaccinated. A merchant Sugiura Kashichi had Hirasawa Byozan paint the scene and presented the picture to Muragaki Norimasa. Dr. Kuwata made a copy from the original painting by Hirasawa Byozan for his family in 1859. In 1941, a descendant had two copies painted by Hayashi Shime. This scroll is an important painting from the point of view of medical history and the administrative control. The original picture's whereabouts had long been unknown. I believe that the scroll owned by Tohoku Fukushi University Serizawa Keisuke Art and Craft Museum may be the original.

はじめに

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館は、2005年10月1日(土)～12月18日(日)まで、特別展「アイヌ文化の新資料－150年前の集団種痘図・甲冑その他」を開催した。開館以来当館館長を務めた芹沢長介先生の要望で実現した展覧会だった。展覧会は好評で、翌年の2月2日(木)～3月26日(日)まで延長展示された。2006年の新年を待ちかねたように、展示品の関連資料収集に拍車がかかり、先生は、ご自分で撮影した資料写真と調査カードを鞆に入れて常に持ち歩いて研究に没頭され、工芸館職員にその都度見解を披歴されておられた。しかし、会期中のさなかの3月16日(木)、まさにアイヌ文化の新資料に見守られながら急逝された。展覧会開催中、お亡くなりになる2日前まで芹沢館長は毎日展示室で展示解説を

され、来館者に多くの温かな思い出を遺すとともに、アイヌ文化に対する深い関心と呼び起こした。

その際の展示品の中で、特に来館者の関心を惹いたのが平澤屏山筆「種痘施行図」(口絵2)だった。19世紀中ごろ、アイヌ集落に天然痘が蔓延したのを憂え、箱館奉行・村垣範正は幕府に医師派遣を依頼、その結果桑田立斎率いる医師団11名の一行が徒歩1カ月で函館に到着し、集団種痘を実施した。その様子をアイヌ風俗画家・平澤屏山が記録したのがこの絵画である。

芹沢先生が、原本と思われるものを古書店から入手したことが知られると、問い合わせが続き2004年6月には、桑田立斎の子孫や、桑田家寄贈の模写本を所蔵する大阪大学名誉教授

加藤四郎氏が来館され、実見して絵の迫力に驚いて帰られた。

芹沢館長個人の収蔵品であった同資料は、2006年12月、ご遺族の芹沢恵子氏から東北福祉大学に寄贈され、当館の所蔵となった。その後も研究者からの調査申請や写真借用依頼が相次ぎ、館としても出版物の形で公開する必要に迫られていた。

今回年報に紹介することで、研究紀要刊行を待ち望み、当資料について執筆を考慮しておられた芹沢長介先生のご恩に報いる一歩としたい。

平澤屏山筆「種痘施行図」概要

・入手のいきさつ

芹沢長介先生亡きあと、そのいきさつについて詳細を記述することが不可能であるが、関係者の記憶を記すこととする。

平澤屏山筆「種痘施行図」原本の存在は長らく不明とされてきたが、サッポロ堂書店の石原誠氏によれば「阪神淡路大震災の直後に、大阪のM書店が個人所蔵者から購入、アイヌ風俗画であることから北海道の石原氏に購入先を相談した。北海道の文化財にもなるべき資料であったが、公共機関を含め地元で購入の意思を示したものはなく、かねてより付き合のあった芹沢長介先生に相談した。アイヌ文化に造詣が深く、すでに波嶋筆「アイヌ人物屏風」、早坂文嶺筆「アイヌ風俗絵巻」、「蝦夷之風俗」などアイヌ風俗画にも関心を持って収集していたため、先生は即刻購入を決断された」とのことである。

入手当初、当資料の保存状態が良くなく、巻き皺などが目立ったため、先生は出入りの表具師に相談、その際「真贋もはっきりしないので、あまりいじらずに治してほしい」と依頼した。表具師のK氏は、裏打ちだけを取り換えることにした。K氏は、当時を振り返り、「入手当初からすると裏打ち紙を新しくしているし、裏打ちする際に水をくぐっているため、すすなどの汚れが取れてきれいになった印象だった」と話す。

・材質形状と寸法

紙本着色 軸装(116.0×103.1)

本紙 70.4×92.2 讃部分 16.5×92.2

軸題箋には「安政4年 蝦夷土人種痘施接之図 村垣蔵」(図1)とあり、当初のものと考えられる。



図1 軸題箋「安政四年 蝦夷土人種痘施接之図 村垣蔵」



図2-1 桐箱箱書「箱館奉行村垣範正 種痘施行図」



図2-2 桐箱蓋裏「荒尾文庫」



図3-1 「平澤氏印」(屏山)



図3-2 「背山臨水」

桐箱(111.0×7.7×高7.4)付 箱書に「箱館奉行村垣範正 種痘施行図」(図2-1)とあるが、当初の軸箱と箱書なのかは不明である。また、蓋裏には「荒尾文庫」(図2-2)の朱文方印がある。

・押印

落款や年紀はないが、右下に「平澤氏印」の白文方印、「屏山」の朱文方印(図3-1)が押されている。また、左上には関防印¹⁾とされる「背山臨水」の白文長方印(図3-2)がある。越崎宗一は「背山臨水の関防印は円熟期の作品、即ち彼のアイヌ絵のもっとも特徴を表はした得意の作品に限り用いた様で、初期作品と推定せらるゝものには見当たらない。筆者の想像する処では「背山臨水」とは函館青柳町の彼の住居の地勢を表はしたものであるまいか、日高、十勝で充分アイヌ絵を研究して画囊を満し函館へ戻って来て描いた比較的後期作品に特に此関防印を用いたのではないかと思ふ」と述べている²⁾。屏山が箱館(函館)に渡ったとされるのは弘化年間(1844～47)だから、「背山臨水」印は、それ以後に描いた絵画に押されたということになる。また、屏山の印章についてまとめた五十嵐聡美氏によれば、当資料にある印章「平澤氏印」(白文方印)「屏山」(朱文方印)のセットは「安政年間から晩年に至るまで使われた印で、ほとんどの屏山の画に捺されている」とし、さらに「背山臨水」の関防印は「蝦夷風俗十二か月図屏風」に見られ晩年に使用したものとしている³⁾。

・塩田順庵による讃

本紙画面上部にはことの顛末を記録した塩田順庵による讃がある。

「蝦膏(夷か筆者注)性頑愚 多不可諭者 如痘瘡瘟疫之類畏之甚於豺狼 一有傳染者 輒父子不相顧 委而避于山中 或至一鄉相率而遷徙 竟使病者萬無一生矣 而辰冬 鎮墓村垣公巡視西部 會遭痘瘡流行之運 男女少壯死者無算 有慘毒不忍見者 於是乎 公惻恒心 藹然啓發且謂 苟如是 則戸口之減 日甚一日 何開拓之為 救之當如捍燃眉 具聞其狀 明年夏 官差痘醫 使之行引接法 第民不肯從 以為種痘病我 皆望風而逃匿焉 公又使吏百方諭之 始得施接法 三月之間 陸續至六千餘人 嗚呼公一念之仁 躋民於壽域 如其多也 世稱公之德 或有圖而傳之者矣 語曰 民是國之本又曰 是食足兵 今公職在巡撫 能充其慈愛惻恒之心 以憫疫氓 薄稅斂 辟田野 勸稼穡 為先務 則不出七年 必至桑麻相望鷄犬相聞 由是以固我疆圉 靖吾邊虞 長絕國家北顧之憂 則亦得有繪公象而鬻之者 豈止是小圖也哉

塩田泰拝誌」



図4 「東都大醫管泰」「松園」

塩田泰(順庵)(1805～1871)は、文化2(1805)年金沢の生まれで増島蘭園に儒学を学び、本姓は宮河。名は泰、号は松園。幕府の医者・塩田宗温に見込まれて養子となった。『海防彙議』40巻を編纂。安政3(1856)年、幕命により箱館にわたり、箱館医学所や学校を開き、文久2年には江戸に帰り幕府の医学教諭となった人物という⁴⁾。讃にある「塩田泰拝誌」には、「東都大醫管泰」の白文方印と「松園」の朱文方印(図4)が押されている。

絵画に記録された内容

平澤屏山が描いた絵の内容を、塩田順庵の讃と、桑田立斎が原本を模写して作らせた1859年本を林司馬が1941年に模写した北海道図書館本にある西島秋航の讃⁵⁾、さらに1892年に発表された富士川游の文章「痘瘡の話」⁶⁾、桑田忠親の著書『蘭方医桑田立斎の生涯』⁷⁾を参考に読み解いてみよう。

安政4(1857)年の5月10日、桑田立斎(47歳)は幕府の老中・阿部伊勢守正弘から呼び出しを受けた。天然痘が流行している蝦夷地に渡り、天然痘予防のためにアイヌの人々に種痘を実施することを命じられたのだ。立斎を推薦したのは、蘭方医伊東玄朴であった。一生涯に10万人の種痘実施を悲願した立斎であったから喜んで引き受けた。このとき深瀬洋春(江戸の蘭方医)も蝦夷行きを命ぜられ一足早く江戸を出発していた。立斎の同行者は、門弟の西村文石ほか3人に若党4人、種痘児1人とその父母2人の計11人。白河の関を越えて奥州路に入り、仙台城下に宿泊、松島から塩竈明神を参拝して南部領に入り、野辺地から下北半島、田名部を経て恐山の地藏尊像を拝し、佐井の港から箱館港に向かった。この間5か所で7、8人の児童に種痘を実施し(連れてきた一人の

子供に牛痘苗を植えて、その膿を他の子供に移し植えると
いったりレー方式が取られた)、善感児の2人を選んで蝦夷
地につれていったのだという。村垣淡路守は「東蝦夷地のア
イヌの人々はとりわけ頑固だから、まずは西蝦夷地に廻るよ
う」勧めた。しかし立斎は東蝦夷地を通過して国後まで渡っ
てみたいと考えていたため、東蝦夷地は立斎が、西蝦夷地は
深瀬が担当することとなった。アイヌの人々は最初は種痘を
嫌がって、山中に逃げかくれしていたが、説得が功を奏して
3カ月で6,000余人が種痘を受けた。

平澤屏山の絵に記録されたのは箱館鎮台奉行所の場面であ
る。隅に囲炉裏のある板敷の広間には、アイヌの老若男女が
集まっている。近江八景なのだろうか水墨山水画が描かれた
衝立を背に奉行の村垣淡路守が中央に座り、左右には代官が
いる。衝立の後には布帛、陣羽織、奉書紙、刀の鐔などのシ
トキ用の飾り板、アイヌ玉、ガラス玉、シントコ、シポ、耳た
らい、片口、天目台と盃、湯桶などの漆器、トゥキパスイなど
が積み重ねられている。これらはアイヌの人々が交易を通じ
て手に入れたと望む宝物ばかりである。おそらく種痘を受
けたアイヌの人々に褒美として配られた品々なのであろう。
緋毛氈に座った黒紋付姿が桑田立斎で、隣で種痘を実施す
るのは弟子の西村文石であると思われる。その近くで巻紙に記
録しているのは、種痘を終えたアイヌの人々の名前を記し、
確認作業を行っている奉行所の人である。

江戸を出立して1カ月後の旧暦の6月だが、囲炉裏には赤々と
火が燃え、老人たちはそばに集まり暖をとっている。子供
たちはお菓子を与えられて、種痘の順番を待っている。男た
ちは長いひげを蓄えて毛深く、その姿が細密に描かれている。
髪容もアイヌの人々の特徴を正確にとらえて描いている⁸⁾。
アイヌの人に見られる皮膚病にかかっていることを示す後頭
部の状態までつぶさに描かれている。女たちは口の周りと前
腕部と手背部にいれずみをしている。成熟した女としての表
徴と考えられていたからである。人々は海老のように腰をか
がめ前屈して歩く姿が描かれる。アイヌを描く時に共通する
特徴である。また、後ろ向きの男の足裏にアイヌの男性特有
の凹線がはっきりと描かれている⁹⁾。子どもたちは耳に赤い
裂をさげた耳飾りを付けている¹⁰⁾。衣服は、袖口や背と裾に
切伏せ文様をつけた立派なアットウシを身につけている人
と、襟口や裾に木綿布だけをつけた素朴な衣服の人、鹿の皮

を思わせる毛皮をつけた男性も描かれている。アイヌ固有の
バツカイニ(子負棒)とタラ(子負縄)からなるバツカイペで
赤子を背負った姿の女性たちもいる。武藤勘蔵「蝦夷日記」
に「帯は木綿のしごき或いはアツシ其外はみな縄の帯なり。
各手に煙草入を下げ、不残跣足なり」¹¹⁾とあるようにアイヌ
は裸足で縄状の帯をしめている。囲炉裏の傍には乾燥した煙
草や、酒瓶、煙草入れ、背負いかごなど日常の生活を伺わせ
るものが生き生きと描かれている。

絵師の平澤屏山(1822～1876)は奥州稗貫郡大迫村(現
岩手県花巻市)に生まれた。23、4歳の弘化年間に弟とともに
箱館に移住、最初は舟子相手に絵馬を描き絵馬屋と呼ばれて
いた。箱館の商人福島屋杉浦嘉七と知り合い、彼の請負場
所であった日高や十勝を訪れ、アイヌの家に住み、アットウ
シを着て、アイヌの人々の気持ちになりきってその風俗を確
実に写生し、やがて「アイヌ風俗画家」として広く知られるよ
うになったのだという。また、酒とアイヌの子供たちが好き
きであったとも伝え¹²⁾、当資料のアイヌ風俗表現の正確さや、
子供の描写の素晴らしさもこのようなところからきているので
あろうと考えられる。特に箱館では在留の外国人で屏山の絵を
求めない者はいないほど人気があり需要も多かったと伝える¹³⁾。

3点の模写本と版画

原本・平澤屏山筆「種痘施行図」をもとに、正確な模写本が
3本作られた。桑田家に伝えられた模写本には原本にある塩
田順庵の讃の後ろに西島秋航の讃が書き加えられている。そ
れによると「村垣公が桑田立斎に実施させた蝦夷人種痘のあ
りさまを、箱館の商人杉浦嘉七が安政4年に画工に描かせ、
塩田松園が讃を書いて村垣公に献じた」とあり、原本が村垣
家に伝来することを伝え、さらに「桑田立斎は画家に原本を
模写させて自分の家に伝えた」とある。この模写本が作られ
たのは、文末に「安政巳未」とあるところから安政6(1859)
年のことである。桑田家所蔵本は原本が描かれてから2年後
に模写されたものということになる。原本を模写した当作品
については「写真は新潟県立美術館提供」として新明英仁が
論文「平澤屏山論」の中で紹介している¹⁴⁾。さらに、桑田分家
の当主の権平は(立斎の長女の婿養子衡平の次男)、1941年
にこの模写本をもとに林司馬に正確な模写本2点を作らせ、



図5 「安政3年箱館奉行村垣淡路守蝦夷土人に始て種痘施接の図」〔平澤屏山筆〕〔村垣君蔵〕〔空翠謄写〕
 (『風俗書報』第93号に採み込み図 1892年 東陽堂)

北大と阪大に寄贈した⁵⁾。

2009年秋、屏山が原本をもとに再制作したと思われる「種痘図」（洋紙 着色）が日本で公開された。ロシアのオムスク造形美術館所蔵の平澤屏山のアイヌ絵12枚の中の1点である。20.4×32.7という小画面で、当館所蔵資料や3点の模写本とは若干構図が異なる。奉行所の村垣公以下3名は一段高い座敷に、六曲一隻の松前屏風（水墨）を背にして並んで座る。衝立はない。さらに衝立のそばにたくさん並べられていたご褒美の品々は見られず、重ねられた箱と布帛がわずかに見える程度である。小画面だからか、アイヌの人々の数も省略されて描かれている。しかし子供たち集団の描写はさすがに迫力がある。絵には「J & H」の透かしが入っており、1862年製の西洋紙を使用して描かれたことが明らかになっている。しかも「辰冬初日」とあり、原本が描かれて10年後の1867年に屏山自身が描いたことが明らかである。これらの絵は1949年にエヴゲニイ・ミハイロヴィッチ・ラヴレンコ（ロシア科学アカデミー会員の植物地理学者）がレニングラードの「古書店第8」で入手したものなのだという¹³⁾。

また、二代歌川國貞が作った横判浮世絵「公命蝦夷人種痘之図」が遺されている。桑田立斎が家蔵の模写本を國貞に写させて、知り合いに配布した錦絵であるという¹⁵⁾。版画に「嘉永二仲冬念立」とあるが、立斎が『牛痘發蒙』を出版した1849年にあたり、また長崎に種痘術が入った年でもある。立斎は、

1857年に実施された6,000余人のアイヌの人々への集団強制種痘によって念願がなかったことを江戸の人々にも伝えなかったのかもしれぬ。

終わりに

軸の題箋にある「安政4年 蝦夷土人種痘施接之図 村垣蔵」の文字は、村垣家が種痘施行図を所蔵していたことを示している。1859年の模写本跋文にあった「箱館商人杉浦嘉七は画工にその状況(集団種痘)を描かせて村垣公に献じた」とある内容と一致する。また、新明英仁は「(行政当事者)の村垣公の命によって、杉浦嘉七が屏風に描かせた可能性」をも指摘する。当時の絵画は、記録画としての機能を持っていた。「種痘施行図」は行政支配上重要な絵画だったからである。

アイヌ風俗画の研究者であった越崎宗一の1959年、1976年の著作でも、また桑田忠親の1981年の著作にも図版には模写本が掲載され、両者の執筆当時原本の所在が不明であったことを示している。

またここに、平澤屏山が「種痘施行図」を描いてから35年後の1892年に発行された『風俗畫報』第93号に挟みこまれた図(「安政3年(安政4年の誤りか 筆者注)箱館奉行村垣淡路守蝦夷土人に始て種痘施接の図」「平澤屏山筆」「村垣君蔵」「空翠謄写」)を紹介したい(図5)。空翠が原本を写して紹介した

図と考えられる貴重な資料である。しかし、当館所蔵資料と異なる点が2点ある。左後方の10名のアイヌの人々が描き加えられている点(丸で囲んだ部分)と、「背山臨水」の関防印がないことである。桑田家に残る模写ほかの計3点の模写本にもこの10人はおらず、『風俗畫報』挟み込み分だけに描き加えられたと考えてよいだろうか。あるいは屏山が描いた種痘の絵が他にもあったことを示すのだろうか。また関防印がないのはなぜなのであろうか。関防印だから抜いたのであろうか。この2点の疑問は、今後解明しなければならない課題である。しかしこの2点以外は正確に模写されている点を重視したい。「平澤氏印」「屏山」印も同じく写されている。しかも画題名が軸題箋「蝦夷土人種痘施接之図」と近似している。

わずか2年後に模写された桑田家蔵本と酷似していることからみても、当館所蔵資料は、種痘の状況を平澤屏山に描かせて村垣公に献じたとする安政4(1857)年当初の、平澤屏山が描いた原本であると考えて間違いないのではなかろうか。

平澤屏山についての研究者である新明英仁は、「屏山は『種痘施行図』によって画名が高まり、アイヌ風俗画の絵師としての地位を確立した」と述べている¹⁴⁾。新たに確認されたロシアのオムスク造形美術館や英国・国立スコットランド博物館、英国・大英博物館、ドイツ・ビーティヒハイムービッシンゲン市立博物館などに所蔵される屏山の作品は、外国人がアイヌ風俗画に興味を抱き、アイヌ風俗画家として著名になっていた屏山に制作依頼して箱館港から本国に運んだことを物語っている。

アイヌ風俗画「種痘施行図」に、模写本が3点存在し、さらに浮世絵版画まで制作させて配布したのは、当事者であった桑田立斎にとって種痘実施が記念すべき、後世に遺すべき大切な事象であると考えたからであろう。それだけではなく、新明が指摘するように、2009年に日本で初公開となったオムスク造形美術館所蔵本の存在によって、「種痘施行図」が屏山にとってもアイヌ風俗画家としての地位を確立した記念すべき絵画であったことを示すことになった。

平澤屏山筆「種痘施行図」は、日本の医学史上、行政史上重要な作品であるばかりでなく、絵師・平澤屏山にとっても重要な起点になる作品だったのである。

註

- 1) 『国語大辞典』(1981年 小学館) p597によれば「書画などの右肩に押す印。その位置が初めてであることを示し、また表装の際にそれより左へ切り込むのを防いだ」とある。また、越崎宗一『アイヌ絵志』(1959年 丸善) p62には「(屏山は)晩年に描いた会心の作品には「背山臨水」の関防印を押している」とある。表具師K氏によれば、「絵師自身が気に入った作品に捺すのは遊印であり、関防印は表装の際に切り込むことを防いだ印」とする解釈が正しいのではないかという。
- 2) 越崎宗一『アイヌ絵』1976年 北海道出版企画センター p51
- 3) 五十嵐聡美「最後の絵師—平沢屏山」『アイヌの四季と生活 十勝アイヌと絵師・屏山』展図録 p29
- 4) 『函館市史』通説編第1巻第3編 古代・中世・近世 1980年 pp674-675
上田正昭ほか『日本人名大辞典』2001年 講談社
- 5) 「蝦夷人種痘之図」(87.0×91.0)木箱入 軸
塩田順庵と西島秋航の画讃あり 京都市立絵画専門学校の林司馬(1906～1985)が1941年に模写した2点のうちの1点で桑田権平氏が北海道大学に寄贈。現在北海道大学付属図書館所蔵で北方資料高精細画像電子展示により公開されている。
- 6) 富士川 游「疱瘡の話」附種痘の由来(承前)『風俗畫報』第93号 1892年 東陽堂 pp22-24この文章の中に桑田立斎手記の「蝦夷地種痘記事」を紹介している。この記事は「坪井信良翁(人類学者坪井正五郎氏の父)の厚意によりて一覽することを得たり」とある。
- 7) 桑田忠親著『蘭方医 桑田立斎の生涯』第5章「東蝦夷地アイヌ種痘」1985年 中央公論社(中公文庫) pp120-163
- 8) 児玉作左衛門・伊東昌一「アイヌ髪容の研究」『北方文化研究報告』第5号 1941年 pp1-88 「18.歳頃になると髪を真中から左右に分けて垂れ下げ切り揃える。切りそろえた線は下顎線から後方に向かって次第に高くなり後頭部の下部が現はれる高さにいたるまで直線的に作られる。後頭部の下部は剃られる」
- 9) 越崎宗一『アイヌ絵志』(1959年 pp28-29)に小玉貞良の「釣魚図」に描かれた男の右足裏を取り上げて「原始生活の顕著さと見るべき足の把握力の逞しさを示す外被の凹線が縦にはっきりと描かれている」と述べている。
- 10) 古河古松軒「東遊雑記」巻之14(『日本庶民生活資料集成』第三巻 1969年 三一書房) pp505-510に「耳にかかる環の図、これをニシカネと称す」として、耳飾りの下に布をつけた玉飾りをつないで下げた図が紹介されている。
- 11) 武藤勘蔵「蝦夷日記」(『日本庶民生活資料集成』第4巻 1798年 三一書房) pp13-21
- 12) 越崎宗一『アイヌ絵』1976年 北海道出版企画センター pp45-58
- 13) 霜村紀子「平沢屏山とその時代」『アイヌの美 カムイと創造する世界 ロシア民族学博物館・オムスク造形美術館所蔵』展図録 2009年 pp160-162
- 14) 新明英仁「平澤屏山論」『紀要 2007』2007年 北海道立近代美術館ほか pp17-57
- 15) 「アイヌ風俗」図1 『蝦夷風俗画展』図録掲載図版 1980年 リッカー美術館